

目標100軒 無柱の木造

1/1階の間。木造とはとも思えない大空間がワッと広がる。箱と名乗るのはタテではなく、木造部分に上り下りするコンクリートの基礎部分もただの箱状につくられている。無駄のいっさいない箱の中に、家具などが置かれて家となる。モダンなひとつの極限といえるだろう。

雑誌で初めて見て忘れられなくなり、その後、いろんな雑誌でたびたび目にして息の長さに関心し、そうこうしているうち、たまたま日曜日の散歩の途中、雑誌で初めて見た家と出くわして驚き、そして今回の訪問である。

現代 住宅 併走

第六回

連載

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu, Photographs by Akiyama Ryoji

「角地の木箱」

Kasai Kiyoshi

設計 葛西 潔

現代住宅
併走

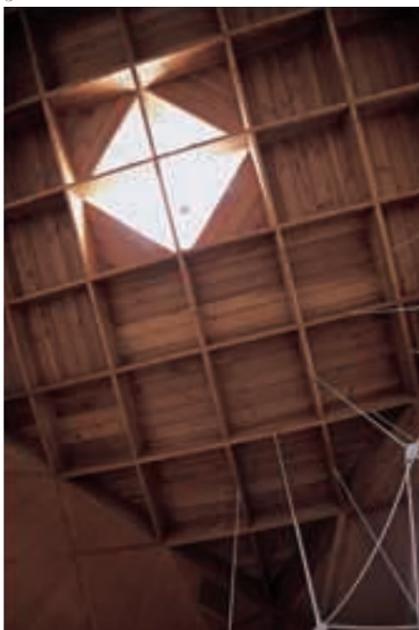
Kasai Kiyoshi × Fujimori Tetsuharu



2



3



4

2/この裏に台所が隠れている。3/台所から丸窓越しにのぞく。4/斜め格子を下から見上げる。5/別棟の。離れへ向かう斜路。少しゆるむがおもしろい。6/この構造を見ると、木のほうが鉄よりすぐれていると感じさせられる。

6



Wooden Box on a Corner by Kasai Kiyoshi

葛

西澤さんの住宅は、ひと目見たら忘れられない。なぜなら、木造なのに壁には柱は見えず、天井には梁も根太も見えず、代わりに壁にも天井にも斜めの格子が走っているだけだからだ。

雑誌で初めて見て忘れられなくなり、その後、いろんな雑誌でたびたび目にして息の長さに感心し、そうこうしているうち、たまたま日曜日の散歩の途中、雑誌で初めて見た家と出くわして驚き、そして今回の訪問である。

訪れた家の正式名は「角地の木箱」といい、1992年完成の、葛西さんの自邸にして斜め格子構造の第一号でもある。

中に入って目を見張った。斜め格子にはない。格子は雑誌で知っていたとおりだったが、意表をつかれたのは空間の大きさと、予想をはるかに超え、じつに五間四方。木造住宅で無柱の五間四方なんて、前例があるのだろうか。普通の木造住宅は二間四方の八畳間が最大で、歴史的にみても、室町時代に成立した九間の三間四方が大きいほうの基本で、小さいほうの基本は一・五間四方の四畳半。日本の木造住宅の部屋の大きさは、大昔から現代まで、四畳半と九間の幅のどこかに納まってきたというのに、「角地の木箱」ときたら、じつに、五間四方に到達している。面積でいうと、それまでの9坪の上限を一気に飛び越えて25坪へと

着地しているのだ。それも、文字通り軽々と。

新しい木造構造を試みる人は10数年にひとりくらい出てくるが、これほどの有効性はまずないし、それよりなにより新しい構造を發明する建築家の作品にかぎってデザインがおもしろくない。構造発明力とデザイン力の和は一定、といわざるをえないが、葛西さんの場合はデザインもいい。

いったいどういう建築家なのか。出は、意外にも、東工大の篠原一男のところだという。篠原に「ここがれまくり」「から傘の家」(61)や「白の家」(66)は図面をすべてコピーして覚え、そんなことしないほうがいいと思うが、文章まで覚えてしまったそうだ。外国ではカーン (Louis Kahn I / 1901 ~ 74) に引かれた。

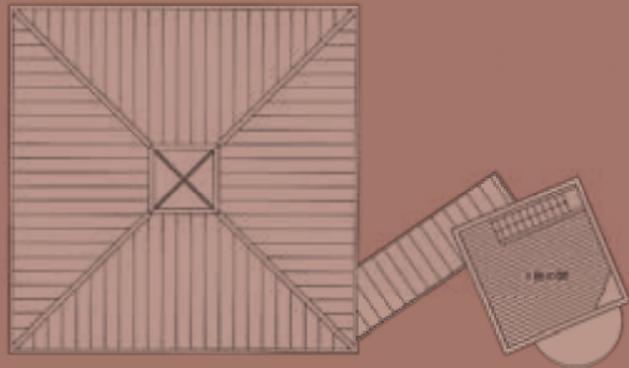
大学院を出て入ったのは山下和正建築研究所。山下のところは2年いて27歳で独立。独立当初は篠原の白の家風のRC住宅を試みた。でも、思い知る。建築作品の個性は、篠原でも山下でも建築家の人柄と深く関係し、違う人柄の人がまねようとしても結局ダメだと。私も、そう思う。人柄だけでなく、知力、身体性、すべての総和として建築は生まれてくる。

当然のように仕事は少なく、ヒマなときは自宅のエスキースをし、これが7年におよぶ。自宅で脱篠原を試みた。

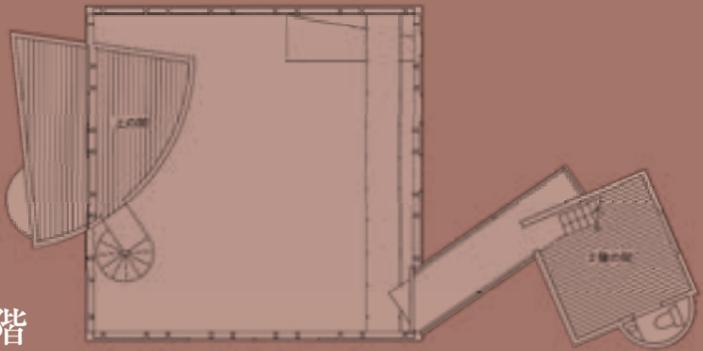
角地の木箱

Wooden Box on a Corner by Kasai Kiyoshi

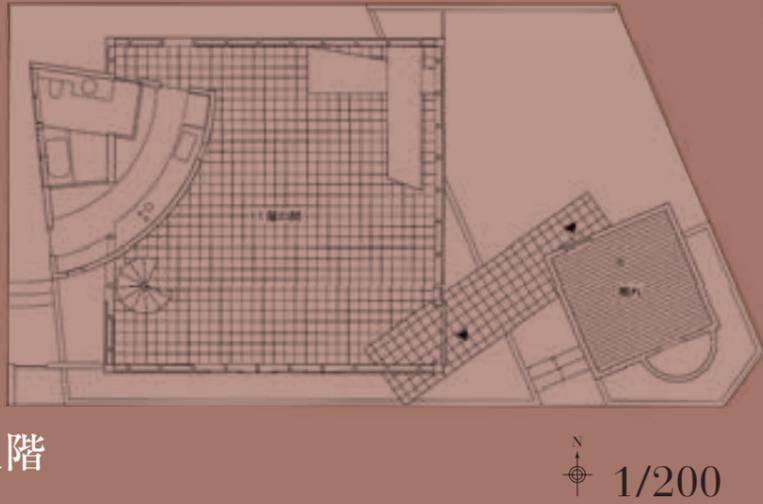
3階



2階



1階



角地の木箱

所在地	東京都府中市
主要用途	専用住宅
設計・監理	葛西潔／葛西潔建築設計事務所
構造設計	増田建築構造事務所
施工	大原工務所
敷地面積	218.94㎡
建築面積	109.10㎡
延床面積	153.59㎡
階数	地上3階
構造	木造
設計期間	1991年1月～1991年3月
施工期間	1991年6月～1992年3月
総工費	3,400万円
図面提供	葛西潔建築設計事務所



7/箱からはみ出た位置にある水まわり。8/南側全景。右手前は別棟の3階建て離れ。散歩の途中、この離れをまず見つけた。9/大空間といい、プランコのようなブリッジといい、サーカスを思った。10/1階の間と離れを結ぶ通路。



葛西 潔 Kasai Kiyoshi
1954年東京都生まれ。74年東京工業大学に入学生、篠原一男について学び、80年同大学院を修了し、82年独立。葛西潔建築設計事務所を開設。斜め格子の木箱のシリーズでブレイクし、今日に至る。「小さい木箱」(93)で93年度東京建築士会「住宅建築賞」。「木箱210」(96)で96年度東京建築士会「住宅建築賞審査員特別賞」、97年度関東申信越建築士会「ブロック会賞」、99年第3回快適住宅コンテスト入選「傾斜地の木箱」(95)で2000年 AMERICAN WOOD DESIGN AWARD 優秀賞。

藤森 照信

建築史家。東京大学生産技術研究所教授。建築家。著書に「明治の東京計画」(岩波書店・毎日出版文化賞)、「建築探偵の冒険東京篇」(筑摩書房・日本デザイン文化賞・サントリイ学芸賞)、「藤森照信の原・現代住宅再見(1-3)」(OTTO出版。建築作品に「神長官守矢史科館」(91)、「タンポポ」(ハウス) (95)、「赤瀬川原平邸」(ラ・ハウス) (97)、「日本芸術大賞」(熊本県立農業大学校学生寮) (2000)、「日本建築学会作品賞」(高過庵) (94)、「ラムネ温泉館」(95) などがある。

現代住宅 併走

Kasai Kiyoshi × Fujimori Terunobu



め格子構造以後の話だった。斜め格子を連作した後、さらに新しい構造を開発し、戦後建築界前人未到の領域に足を踏み入れた。しい構造というのは、木箱2×12工法なるもので、斜め格子のときと同じように木の大きな箱をつくるのだが、構造が違い2×12材を使う。ツーバイフォー材の4インチを12インチまで伸ばした超幅広材で門形のラーメン構造をつくり、これを伏見稲荷の赤鳥居のように連続させて構造とする。これは自分で考え、特許をとった。

ここまでは、斜め格子構造の延長上の話だが、私がタマゲたのはこの先で、なんと、100軒を目標にして、現在(2007年12月)、44軒まで実現したというのである。難波和彦も120棟を超える連作住宅を実現しているが、難波とは違い、自分のもつ特許工法だけで100棟を目指し、年10棟の割合で邁進しているという。

これだけでも驚きだが、もっともつとタマゲたのは、なんと、じつに、その工事を自分で請け負っているというのだ。自分で設計して自分で建てている。建築家側からの設計・施工の一貫。戦後建築界前人未到領域突人と評すしかないだろう。

建築の理想は、設計・施工の一貫にあり、と長らく考え、一部で実践(「茶室徹」(2005))もしてきた私としてはうれしい。

葛西さんが若い頃魅力を感じた建築家は篠原とカーンのふたりだったが、今は、ジャン・プルーヴェ(Jean Prouve/1901~84)と佐藤秀三のふたりだという。プルーヴェも佐藤も、設計者にして施工者でもあった。戦前から戦後にかけて活躍した佐藤は、和・洋両方の木造に関して一流のデザイナーだったが、施工の腕もみごとで、大工の技が気に入らないと、チョーナのハツリを夜、自分でやっていたという。葛西さんは直接手を出すわけではないが、請け負い、職人を指揮して工事をすすめる。「ライバルはいません」と葛西さんは言った。確かにいない。前人未到。

でも、木箱2×12工法は、つくるといふことについての本質的問題をはらんでいるという。軽くて強くてつくりやすく安いの。安いについては22坪の住宅を950万円を実現したほど安いのだが、この合理性きわまる工法について、葛西さんが、ある地方の現場で説明したとき、大工さんが言った。「でも、オレたちの腕はどこで発揮すればいいのか」

この問いは、今も、葛西さんの胸中に宙吊りのまま。